

これからの市民活動・協働を考えるシンポジウム 概要報告書

日時 令和元年6月22日(土)

午後1時～午後3時30分

場所 鎌倉商工会議所 ホール

目的 市民活動や協働を推進する「つながる鎌倉条例」(平成31年1月8日施行)に伴い、市民活動や協働によるまちづくりを進めていくために、既に市民活動を行っている方だけではなく、これまで関心のなかった方も含めて、本市における市民活動や協働の活性化による鎌倉の未来を考える。

対象 要件なし(広報かまくら、ホームページ、市掲示板等で周知)

参加者 55人

タイムスケジュール

12:30 会場

13:00 開会

13:10 基調講演

13:50 休憩

13:55 パネルディスカッション

14:55 参加者との意見交換

15:30 閉会

第1部 基調講演「市民活動を取り巻く状況について」

立教大学コミュニティ福祉学部 原田晃樹教授

○講演のポイント

- ・現在の市民活動に求められていることは何か。
- ・市民活動の社会的な価値とは何か。
- ・持続的な市民活動の条件とは何か。



市民活動団体の数・規模

特定非営利活動法人促進法が制定されてから 20 年で NPO 法人が 5 万を越えるほどになった（コンビニ件数約 58,000 件）。しかし、ここ数年は増えていない。NPO 法人のほかに、様々な法人格を取得できる。社会福祉法人、学校法人、一般社団法人など他の法人数は増えている。

なぜ市民活動は必要なのか。

市民活動に何を期待するか。期待の意図が 2 つある。

①政府に代わる公的サービス供給能力への期待

②市民活動団体が供給することにより、より価値があるという考え（市民による社会の実現）

→「市民活動ならではの価値」をどこまで重視するかで考え方が大きく異なる。

「市民活動ならではの価値」とは何か。鎌倉では市民活動に何を期待するのかを考えていく必要がある。

市民活動の展開のプロセス

①出入り自由の自発的な集まり、活動の動機は個人のやりがい・自己実現

↓参加者が増えると、回数を増やしてほしいと要望が出てくる。人手が足りなくなる。

②自己実現志向からニーズ志向へ

↓自分達は家事サービスをやりたいが、やりたいことと異なるニーズが多くなったときにどうするか。※活動を続けていく上でのターニングポイント

A 当初のやりたいことを続ける。

B ニーズがあるなら、それに応える。

どちらを取るかによって組織の方向性が変わってくる。

③ニーズ志向型活動の組織化と社会的責任

目標設定が必要になる。また、食事づくりの衛生管理など事故のないように一定のルールなどが必要となってくる。「好き嫌い」ではなく、組織で必要とされる仕事にも従事。

市民活動団体の特徴は、規模が大きくなることが望ましいとは限らない。小さいグループには、小さいグループなりの意味がある。事業型団体は、きちんと事業を継続できるように専門家を連れて、その人にあったものを提供できるということも大事。

持続的な市民活動の条件

①地域の人、当事者の声を運営に反映させる仕組みを構築する。

②福祉、環境、こども支援の団体など、個々の団体ではよい取り組みをしているが、縦割りで見えてしまいがち。縦割りの環境を越えるともっといろんなつながりの可能性がある。意識的につなげるような関係を作ることが大事。中間支援組織の役割は大きい。

③ ①・②を前提とした上で、公的な基盤が必要。市民活動団体へのサポート、中間支援組織へのサポート、市民活動の場のサポート、市民活動団体の声を聴いて、施策に反映させるような場などが必要。

この三つが、つながる鎌倉条例の制定により、一步でも二歩でも具体化できると全国に誇れる条例になるのではないか。

第2部 パネルディスカッション

「これからの市民活動や協働について」

【コーディネーター】

認定 NPO 法人藤沢市市民活動推進機構 藤沢市市民活動推進センター センター長 東樹康雅氏

【パネリスト】

立教大学コミュニティ福祉学部教授 原田晃樹氏

一般社団法人 SDGs とうほく代表理事 紅邑晶子氏

特定非営利活動法人湘南バリアフリーセンター理事 松本彩氏

特定非営利活動法人鎌倉市市民活動センター運営会議副理事長 西畑直樹氏

①市民活動の目的とミッション（社会的使命等）の再確認
東樹氏

今年、NPO 法が制定されて 21 年になる。社会が多様化・複雑化してきている。市民活動の目的とニーズは合致しているのか。先ほどの原田氏の話のなかで、市民活動団体や NPO 法人は、最大ではなく、最適を目指す組織であった。自分たちの目的が本当にこれでいいのか、ミッションが今の時代にあっているのか再確認しながら進めていきたい。



○学術的見地から現在の市民活動の現状をどのように捉えているか？

原田氏

鎌倉には、草の根の活動をされている方が多いとうかがっている。何かやり出すときに、まず、初めの一步が踏み出せる環境があるかどうかが大変なこと。もう一つは、そのような団体が、いろんな事業をしたり、助け合いをしたりできるように継続するということが非常に大事。条例を制定する意味があるとすると、いま取り組んでいる事が、次世代まで続くような環境を作るにはどうしたらよいかを示せたらよい。また、いろんなタイプの人同士が、同じテーブルでお互いの考えや意見を言えるような関係を作ることが大事。

3つの論点

①市民の活動が活発化し、それが続けられるための条件

②市民同士が、横の関係をどう作れるか

③行政が市民目線で一步踏み出すための根拠となるような指針や基盤づくり

○鎌倉の市民活動の状況は？

西畑氏

センターに登録している団体は、378 団体。小さな団体が多い。10～20 人位の団体が一番多

い。年代としては、60代70代が多く、比較的年齢層は高い。また、特徴的なものとして主婦層が多い。

○震災からの復興の道ゆりを経験された観点から、市民活動の価値、ミッション、あり方をどのように捉えているか？

紅邑氏

せんだい・みやぎ NPO センターは、市民活動サポートセンターの管理を市から任されて6月30日で20年になる。生涯学習団体は、市民センターなど、既に使える施設が別にたくさんあったが、そこは市民活動団体が使えなかったのが、サポートセンターは、基本的には、市民活動団体の利用に限ったものであった。阪神淡路の震災のときは、NPO法もまだ制定されておらず、災害のときに動くときにイニシアチブをとることができなかったが、東日本大震災のときは、法人格を取得している団体や一般社団法人を取得した団体がたくさんあって、被災地支援のミーティングをする場所として、普段は有料だが、半年間くらい無料で施設を提供した。思った以上の方に利用していただいた。

被災地支援の助成金はたくさんあったが、ある団体が助成金を使った活動が地元の団体でどれくらい使ったかという比率を調べた。一番大きな被害であったのが石巻であったが、石巻にたくさんの団体が入っていったが、外の団体が多かった。仙台は、仙台の団体が使ったお金が大きかった。市民活動サポートセンターから育った団体が被災地支援に貢献したことが調査で明らかになった。鎌倉においても、このような団体が既にあることはよいことであるし、災害時などに地域の団体がどのように機能するか、横の連携ができるかということも、平時にネットワークができてきているかによると感じる。

○被災後、ソフトの部分でいち早く連携に取り組んでいたという印象を受けている。横の連携ということで「れんぷく」も発足されていたが、どのようなものか。

紅邑氏

震災後、れんぷく（みやぎ連携復興センター）を立ち上げ復興支援をしてきた。その後、岩手と福島にも復興センターができて、被災地3県で連携をとって、復興庁とも一緒に活動していた。毎月1回定期的に会議を開き、被害地の状況の報告や自治体や企業との調整を図っていた。みやぎ連携復興センターのプロジェクトチーム「つなプロ」では、緊急性があるものについては、それぞれのリソースを持ち寄って対応する仕組み作った。

○相互提案協働事業を提案したきっかけは？また、どのように事業を展開していくのか？

松本氏

私たちの団体は、車椅子で入れる鎌倉の美味しいシラス丼屋はどこかと聞かれたときに、ここは車椅子で行かれるとかを情報公開している。団体を立ち上げて4年目になるが、小さい団体なので、私たちのところに相談に来る人は、詳しい人で、よく調べてたどり着くが、市に相談したり、観光協会に相談する人がほとんど。行政が持っている特性と団体が持っている強みは違う。例えば、市が持っているバリアフリーマップが、最後に作成されたのはいつか聞くと、昭和61年が最後だという。更新するのがとても大変であるという現実がある。個人では、す

ばらしいバリアフリーマップを作っているが、それが更新されていない。必要な人に届いていない現状を見て、私たちが1団体で作るよりも、行政と一緒に強みを生かして発信していく、必要な方と連携して進めていくことが必要ではないかと思ひ提案した。

②2030年に向けて、市民活動を次世代につなげるために今何をすべきか

松本氏

キーワード：誰でも気楽に

誰でも気軽に参加することが大事と思ひ、このキーワードにした。障害があってもなくても参加できたり、日本人でも、外国人でもいろんな立場の方が地域に参加する。自分がおかしいと思うことは、自分で解決できる環境と一緒に作れたらよいと思ひこのキーワードにした。市民活動やボランティアをするのにお金がなくてはいけない、健康でなければいけない、時間がなければいけないということがよく言われるが、自分の生きがいだとか、自分の生きていく糧となったらいいのではないか。

紅邑氏

キーワード：なりたい東北 2030 SDGs の主役はあなた

私たちの団体は、去年7月に設立した。1周年記念企画のタイトルを「なりたい東北 2030 主役はあなた」として呼びかけをしている。皆さんが取り組んでいる事や気になっている事は、SDGs とつながりがある。取り組んでいる事と課題になっている事を別々にするのではなく、つないだ形で取り組むことが大事。2030年はそれほど未来ではないが、これまでの10年と比べると、社会もいろいろ変わってきている。人ゴトではなく、自分ゴトとして捉えていくことが、まず第一歩だと思ひている。

皆さんが、レジ袋をもらわないで、マイバックを持っていくことなども、小さいことだけれども、すでにアクションを起こしていることも含めて気づいていただき、次の取り組みを自分なりに模索して、課題を誰かに解決してもらうのではなく、自分で解決していくというスタンスが大事ではないか。

西畑氏

キーワード：対話と自立

市民活動をしている方は多いが、団体間で協働であるとか、一緒に何かをやるのが少ない。意見を言い合うのではなく、相手のことを考えつつも、どこで協働ができるか対話をしながら進める関係づくりが必要ではないか。また、世代間のギャップがあると思ひますが、若い人、高齢の方など世代間の対話も必要ではないか。議論はあるが、対話がないのが現状なので、対話を大事にしていきたい。

以前、フェイスブックで、どれだけたくさんの他者に頼れるか、頼りにされるかとの関係づくりが自立である。独立独歩ではなくて、頼り頼られるかが自立ではないかと書かれていた。市民活動にも言えると思ひます。

SDGs については、17のターゲットの中でも、「環境」、「教育」、「健康」、「気候」の関心が高

いと話を聞いた。身近な市民活動に結びつける糸口ではないかと思う。

原田氏

キーワード：チャレンジと協働

市民活動の組織のマネジメントという授業を受け持っている。市民活動のことを学ばせた上で、現場に行かせる導入の科目であるが、そこでアンケートを行った。この10年で保守化が進んでいる。社会の問題について目を向けることは、危ないことだと変な刷り込みがある。周囲に店がないような田舎（現場）に行かせてみると、学生が変わって帰ってくる。何かにチャレンジしようという意欲を注ぐ何かがあるのではないかと。周りの空気を見て同調する圧力みたいなものが社会に蔓延していて、それが若者を苦しめているのではないかと。第一歩が踏み出せる環境になっていくと社会が変わるような気がする。学生もきっかけさえあれば我々の年代よりも遙かに前向きに取り組んでいる。周りとの関係のなかで自分がある事が分かるような関係はすごくよいと思う。市民活動で泥臭いことをやりながら、いろんな人達と関係を持って自分の居場所や存在意義を見出していくことは、すごく大事だと考えた。

第3部 参加者との意見交換

①今回のシンポジウムを通じて、パネリストに聞きたいこと

松本氏への質問

○現在、高校2年生だが、松本氏がされている活動を自分ゴトにするために、私にもできるような初めの一步を教えてほしい。

松本氏

年に1回バリアフリービーチというイベントを行っている。障害者の方が海に入るという活動だが、毎年、高校生がボランティアとして参加している。まず参加してみるのが楽しい。遊びながらボランティアとして参加することが必要と思う。



○紅邑氏への質問

いわゆる「市民活動条例」を活用するために大切にすべきことは何か。市民側、行政側、そして中間支援組織の3者の立場から教えてほしい。

紅邑氏

仙台市のセンターを作ったときは、設置条例ではあったが、市側からたたき台の案が示された際、市民側もいろいろ意見を言っていこうということで、今日のようなシンポジウムなどの場があったりして条例ができた。そのときに大学の先生が「条例ができて終わりではない、条例を活用していくこと。それと条例は変えられる。条例も社会情勢によって変えることもしなくてはいけない。できあがって終わりではなくて、条例も育てていかなければいけない。」と言われた。私たちもそのようなスタンスで、施設の管理だとか、自分たちの活動を行っていた。



○西畑氏への質問

団体間の協働や連携を妨げている要因は何か。鎌倉特有の要因はあるか。

西畑氏

去年の市と市民活動団体の協働事業で、発達支援のことをもっと知ってもらおうという事業があった。進めるにあたって、市の担当課を決めなくては行けないが、発達支援は、一生の問題。就学前、就学中、就学後で担当の課が異なる。それを横串に刺

して進めないと解決しない問題がある。このような課題の相談があったので、横串に刺して行政側は、3課が協力して協働事業を実現した。このように、今までの既成の形を変えていくのも一つの方法だと思う。

先ほど「対話」という話をしたが、自分たちの活動をしているなかで、ふと横を見たときに同じような活動をしている団体だとか、あるいは、自分達の団体にはないものを持っている団体がたくさんある。もう少し周りを見ることも必要だと思う。

○原田氏への質問

地域活動は、定年後の社会貢献、生きがいという世代が担い手の大半を占めている中、現役世代、働き世代が有償（交通費＋ α 程度ですが）を求めた時、高齢者世代と考え方のギャップを感じる。活動の継続には、有償で担い手を確保していくことが有効なこともあると思うが、事例や先生の考え方などを聞きたい。

原田氏

学生にもいくつかのパターンがある。一つは、アルバイトの代わりに福祉的なサポートをするケース。学生が参加している度合いを見ると、必ずしも有償だからそうする学生が多いわけではない。私たちの役割は、学生は何もしたくないように見えて、内に秘めた部分があって、それを表明して、アクションを起こす促しがあるかが大事。第一歩を踏み出せるような場があるとよいのと、そこで活動している学生が何のためにいるのかを振り返る場があるとよりよい。このような場があるとお金に関わらず続くと思う。私たちの課題でもあるが、一つはチャンスを与えるということとその活動することの意味づけを本人に振り返らすことが重要ではないか。

○松本氏への質問

市民活動参加への心理的バリアを下げるためには。

松本氏

まず参加してみるのが大事。それが心理的バリアになるのかもしれないが、知っている人に紹介してもらおうとか、誰かがいるとやりやすかったりする。イタリアに行った時に、イタリアは救急車がボランティアで運用されていたりする。その団体にヒアリングをしたときに、なぜボランティアをしているかと聴くと、友達がやっているからと答える人が多くいた。バリアフリービーチも誘われたから参加した人も多い。ボランティアをしている人にアクセスして一緒に

参加してみるもの大事ではないか。

○原田氏への質問

鎌倉の市民活動は、高齢化が進んでいる。次世代に引き継ぐ上で何が壁となっているのか。

原田氏

組織を次の世代に引き継ごうとするとき、絶対に必要となるものが、新しい人材をどのように入れるかということ。田舎でうまくいっているところは、コミュニティの中に外の人が必ず入っている。ガソリンスタンドの経営や地域にある椅子をどうするかなど、町内会の人たちだけではあまりうまくいかない。UターンやIターンで来た人達などを無理やりでも入れて、そのような人達の意見をオープンな場で聞かせて、最初はフリクションを起こすが、半年、1年続けていくと収まるところに収まる。いろんな人を組織の運営に関われせるかということが大事だと思う。



②「あなたが思い描く市民活動を、未来へつなぐためのキーワードとは？」

「信頼」「行動力」「役割」「自律」「立場をわかり合う」「巻き込む！巻き込まれる！」「世代間交流」などのキーワードを会場からいただいた。

